
22 ファッション

日本にいるときは、どちらかというとは、ファッションに気をつかわないほうだ。服を買いに行く時間を確保できないということが主な理由だが、それだけではない。うまく説明できないのだが、ファッションに関する社会的な雰囲気、あまり好きになれない。

まず何より抵抗があるのは、ファッションが制服化していることだ。ある髪型や、服の形、色が流行すると、いっせいにそれに画一化されてしまう。若者がみんな同じような髪型をし、同じような服装になってしまう。たとえその人の体型などに合わなくとも、そうしたことより流行の原理が優先してしまうのだ。極端な言い方をすると、個性なきファッションということだろうか。それは、ファッションの基本に矛盾しているはずなのだ。

イギリスは、もちろん、ファッションの先進地ではない。それでも、人々の服装をウォッチングして楽しいのは、個性豊かに自己主張をしていることだ。私の師匠のジョン・コーリス氏は、いつも首のまわりに同心円状の模様がある北欧風のセーターを着ている。はじめは服装にかまわない人なのかと思っていたが、どうやらそれをトレードマークにしているらしい。昨年亡くなった園芸番組の人気者、ジオフ・ハミルトン氏は、いつもチェックのシャツを着ていた。息子さんが、もう少し何とかならないのかと言ったが、このシャツのどこが悪いんだねと答えて、ずっと着続けていたという。知り合いの教授夫人は、青が好きで、青を基調に服を選ぶといていた。

もうひとつ私がいじめないのは、日本の有名ブランド信仰だ。ヨーロッパの著名デザイナーの名前が入ったこたつ布団や、バスマットまで売られている。あれは、いったいどういうことなのだろう。トップ・アーティストが、そんなものまでデザインするはずがないから、名前を貸しているのだろう。東洋のかなたの国でどう評価されようと、芸術家としての名前に傷はつかないから、金儲けと割り切っているのだろうか。もちろん、有名ブランドのものにしてあげば、極端に品質の粗悪なものにあたる危険性が低いという声もある。デザイナー名の品質保証書のようなものというわけだ。現代版「宮内庁御用達」だろうか。

ロンドンの高級ショップでは、最近では日本人がたいへんなお得意様だ。日本人用に特別な品揃えまでしている。きっと、ものすごい日本マネーが落ちているのだと思う。もちろん、それは悪いことではない。有名ブランド品にしても、本当にそれが良いものであり、その人に似合うのならば、それだけの値打ちはあるだろう。だが、そのあたりがたいへん疑わしい。たとえば、ロンドンのある高級ショップのマフラーは、若い人の場合はかなり色合わせがむずかしいと思うのだが、日本ではよくそのマフラーを見かける。そして、かなりの確率で、たいへんセンスの悪い組み合わせになっている。

ファッションとセックス・アピールとは、不可分の関係にある。とくに女性の場合は、体の美しいラインをどう表現するかが大きな問題だ。日本人は体型が違うから、ヨーロッパの人とは勝負にならないといわれることもあるが、私の姪が選んだあるイギリスの服は、ほれぼれとするほどよく似合い、美しかった。だが、残念ながら、その服は、日本では着られないのだという。胸が少し大きく開いているのと、スカートのスリットをとめるボタンが、かなり上までしかないのだ。私にいわせると、その胸の開きとスリットを少しでも変えてしまうと、もうその服の軽やかさは失われてしまう。このあたりは、とても微妙なのだが、きっとそこに決定的な差があるのだろう。没個性とブランド信仰と、そして、ある種の自己規制が、日本のファッションを豊かさを阻害しているように思う。